

科学から叡智の時代へ

大震災をどうにか乗り越え、新年を迎えました。今年は復興のカギとなる年、皆さんのひき続きの御健闘をお祈り申し上げます。

(一) 昨年人々は、原発の事故に衝撃を受けましたが、とくにそれが科学・技術の先端国日本に起こったことで世界に緊張が走りました。

今日、私たちの生活は、すみずみまで科学に支えられ、科学がなければ人間社会はほぼ遺滅すると思われまふ。ただこうした状況になったのは、人類の歴史から見ればついこの間のこととなります。科学が、人々の生活や社会の動向に大きな影響を及ぼすようになったのは近代、とくに産業革命以降、資本主義の発展につれ急速な発展をみせました。科学は、あらゆる事象は解明できるし、今できなくても先行き必ず究明できると宣言してきました。科学は卓越した合理性、実証性によって、最も進んだ、最も確かな、最も高度な認識の形態とみなされるに至りました。哲学が宗教より優位に立つようになり、さらに科学が、哲学を凌駕して価値体系の最高の位置に着いたのです。

あらゆる学問が科学的であろうとし、私の学生の頃、高名な法学者による「科学としての法律学」という書物まで現れました。やがてそうした動向は消え、法律学は、*juris・prudence* の名のとおり、その手法は叡知でよいとなったようです。ただ社会科学、人文科学などの呼称はいまだ残っています。

(二) しかし、20世紀に入り科学の展開は、科学自身の限界を告白するものともなりました。

宇宙の極大と極小の世界は、確実に知ることがそもそも原理的に不可能な分野が多い。生命などの複雑系についても、科学的方法ではその躍動の姿は捉えられない。いまの地震学にみられるように、科学では、奥を探れば探るほど知ることが不可能なさらなる奥が出てくるといわれるようになりました。

現代の認識論では、事物全体の客観的姿というものは、本当にわかるものではない、当面の目的を達成するための記述、把握ができるだけだというのが常識になっていると思われまふ。

核反応は、地球上の化学反応のエネルギーの1万倍の力をもつといわれます。それは生命活動とは本質的に矛盾し、現代技術では全く統御できないもの。活用と惨事が諸刃の剣というのが、核エネルギーでしょう。放射能被害は予想だにしない広がりです。自然に対する畏敬をとり戻し、人知の限界を自覚した21世紀の新しい道を日本が示せるか世界が注目しています。

(三) 科学は、客観性、普遍妥当性をもつものです。にもかかわらず、それは至上のものにはなりえない。科学は目的のための手段であって、それ自体目的概念たり得ないものです。結局科学が何を取り扱い、どのように扱うべきかは、科学以外の知恵全般で決めるほかなく、とりわけ倫理の観点が求められることになります。

このたびの地震・津波では、産業から取り残された狭い地域に保存されていた「ここから下に家を建てるべからず」という石碑や、「てんでんこ」などの避難の仕方についての伝承が、被害を最小限に食い止める役割を演じました。堤防は役に立たなかった。

人類が社会を構成してきたのは、慣習、道徳、掟によってであるといわれます。つまり根底にある秩序、倫理によって社会は存続するのです。ただ現代では変化する社会にモラルが追いつかない。とくに科学は功利主義と結び付き易く、科学を正しく使うための倫理確立も容易ではありません。

(四) 当センターの課題の一つは、エネルギー問題です。方向は見出せても、解決は現実的でなければなりません。政府が推進する「総合エネルギー政策」について、微力ながら、長期的視点に立って応援していきたいと考えます。当センターはまた法制度の変更により、「一般社団法人」への移行をすすめることになります。引き続き御支援のほどお願い申し上げます。

(2012. 1. 17 (社) ぐらしのリサーチセンター賀詞交換会、挨拶)